

# 展示室—情報の行き交う場

情報が世のなかに溢れ、教育の場としての存在意義が薄れつつある博物館の展示室。

では、これから展示室の役割はどういうものか。どうすれば人が集まり、メッセージを伝えることができるのか。滋賀県にある琵琶湖博物館の取り組みのなかに、その答えのひとつを探してみよう。

**布谷 知夫** (ぬのたに ともお)  
琵琶湖博物館学芸員

琵琶湖博物館の展示室には展示交流員と呼ばれるスタッフがいる。彼らは来館者の話を聞きながら、必要な説明をおこない、その結果を日報に書き、また面白かった話もノートに記録している。こうして展示室で起こっているいろいろな交流についての情報が蓄積されてきた。

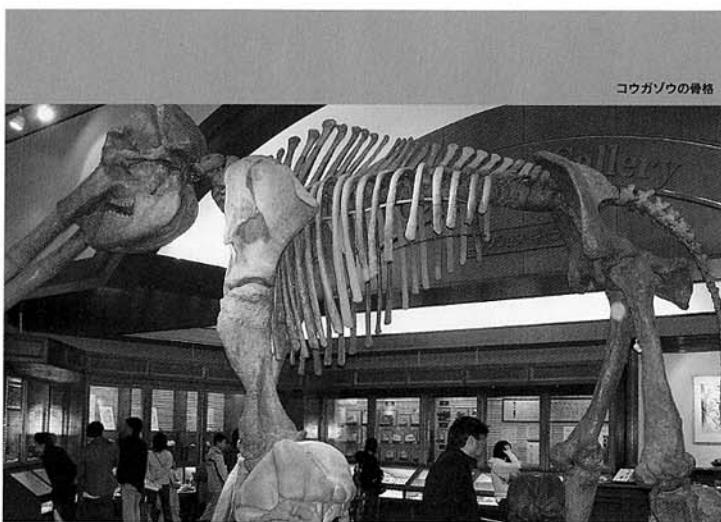
そうした情報のひとつに、もう経験者はいないだらうと情報収集をほとんどあきらめていた戦前の丸子船という

して子育ての話になり、相手の若いお母さんから子どもの食事と虫歯の相談を受け、その交流員の前職の知識から相談に乗ってあげたとか、その民家を見て、お姑さんからいじめられたのを思い出すのと同じくこの展示には近づけない、と昔の話をされた、というような余録のあるものもある。こんな話を聞いていると、博物館の展示について疑問に感じるだらう。人は何を目的にして博物館に来るのか、人はどういう展示を見て楽しいと感じるのだろうか。

## 教育の場でなくなつた展示室

もともと博物館の展示は博物館からのメッセージを来館者に伝える場である。博物館では資料を収集し、研究をして、その成果のなかからストーリーを考え、メッセージを込めて展示を作り上げてきた。博物館がメッセージを強く意識する以前には、展示室でパネルと標本を見て、その内容について教育をする場であったかもしれない。けれども博物館がもつている情報を使って、展示室で教育をするというスタイルは大きく変わらざるを変えなくなつていている。それはテレビやインターネット、出版物による情報の多さによる。例えば世界中の自然について、あるいは自然環境の変化について、大多数人はテレビの映像で詳細に知つていて。N.H.Kの大河ドラマ「かかわつて、ある時代の歴史なども詳

コウガゾウの骨格



しく解説されている。

一般的にいって、博物館の展示室で初めて知つて感動を覚えるというような経験は今やほとんどないのではないだろうか。「ああ、これがテレビでいつていたあの話か」とか「テレビで見たのと同じだ」とかいうような見方がされている。

それでも多くの方が博物館の展示室を訪れる。博物館の魅力は展示だけではないが、ここでは展示に限つて考えてみよう。人が展示を見に来るのは、そこが楽しくてわくわくする場所だからである。博物館や美術館に行こうとする人が、「さあ、今日は勉強をしよう」と思つたりはない。自分の楽しみで、あるいは友人や家族などとの楽しい時間を過ごすために博物館に来るのである。

「楽しい展示」という言葉に対しても方からの批判を受けたことがある。博物館には戦争や差別などのもつと深刻なテーマがある。確かにそのおりではあるが、博物館の楽しみをわたしはエンターテインメントだけとは考えていない。自分の知らないことに気づき、自分について見直すことができるような刺激的な経験が楽しげであると思う。例えば現代社会で一番楽しい場所のひとつはテーマパークだといわれる。そこは誰に対しても同じ楽しみを提供するが、



民家の移築展示「富江家」



4000年をつらぬくインドのチェス

製作地／ラージャスタン州 標本番号H9292

小西 正捷 (こにし まさとし)  
立教大学名誉教授

零の発見と並んで、チエスは世界に対す  
るインドの貢献、という人もいる。紀元前二  
〇〇〇年以前にさかのほるインダス文明期  
の遺物にはすでに、チエス用かと思われる  
格子目の付いた煉瓦製の厚い方形盤が陶  
製あるいは貝石製の駒とともにモエンジヨ  
＝タロやハラッパーなどの遺跡に出土して  
いる。ローテル出土のものには動物や山車  
の形をして底部が平らなものがあつて興味  
深い。

のちのチエスの駒に王ラージヤ（今日の  
西洋チエスのキング・司令官マントリー（ケ  
イーン）、象ハステイン（ビショップ）・馬ア  
シュヴァ（ナイト）・戦車ラタ（ルーク）・歩兵  
バダーティ（ボーン）の区別が生じる最古の  
例とも考えられるが、当時のルールの詳細  
はわからぬ。ただし文献上、その具体的な

向き合つた四人で遊ぶものであつたらしい。各陣地が異なる色をもつ「四方陣」からこのゲームはチャトウランガとよばれ、それがのちの六世紀ころにペルシアに伝わってシャトランジとよばれるようになる。さらにはアラビアやビザンティン世界を経て、ヨーロッパへは九、一〇世紀に伝わった。そのルールが現在のようにはほぼ固まつたのは一五世紀のことで、インドでは以降、ムスリムの王侯貴族のあいだでもっとも人気のあるゲームとなつた。西洋でもチエスは、一八世紀には貴族層のみならず一般市民のシンップまであるが、残念ながらインドの成績は、昨今どうも振るわない。

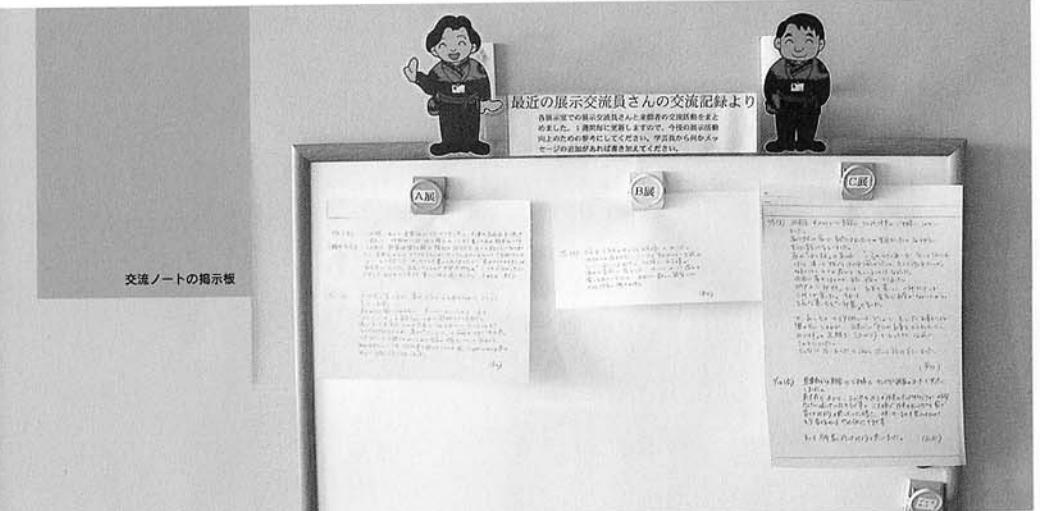
展示をもつと大切に

博物館の展示とは、まず学芸員があるメッセージを伝えることを目的としている。しかしそのメッセージはストレートに届くとは限らない。さまざまな受け取り方がされることを前提として、何段階かのメッセージ性を準備した展示を考えなければならぬだろう。そしてメッセージをどのように準備したとしても、必ず人が博物館に来てくれば、そもそもメッセージを伝える機会すら準備できることになる。博物館が人を迎える



琵琶湖博物館のこの展示コーナーでは、高齢者の団体と学校団体などが一緒になると、高齢者は近くにいる子どもたちに展示物について説明し、みんなが展示

琵琶湖博物館の「民家の暮らし再現展示」では、展示物を見たことで普段は忘れていた当時の暮らしありの自然・家族のことなどを思い出し、その具体的なイメージを伴って、今の自分の暮らしのことなどを考える。そしてもし同伴者がいれば、その人にに対して、展示物やそれに関連した個人的な思い出などを話すだろう。そういうことを思い出し、口にすることによって、さらにイメージは膨



解説者になつてゐるという状態ができてしまうのである。

琵琶湖博物館では展示室に展示交流員というスタッフを配置しており、交流員は来館者の話を聞くことを主たる仕事にしている。そして文頭に書いたようにさまざまな来館者と話をし、ときには相談に応じることも含め、来館者にどうて展示室では自分が主体であり、展示は楽しいものだと感じてもらうことがでできると考えている。

以前におこなった「湖の船」という企画展示の際には、来館者からの情報だけではなく構成された展示コーナーを作つたことがある。展示交流員が展示室で書き込んだくれている交流ノートには、そのような情報が数多く記録されている。琵琶湖博物館では毎週、その週の記録のなかから一部を「ブリー」して館内の内部の掲示板二カ所に貼り出し、館員が読んでその経験を共有できるようにしている。

れる機関である以上、博物館は楽しい場所でありたい。そして人は熱中した状態で一番よく学ぶ。

れることがないかもしれない。しかしながら、展示が博物館の顔であることは間違いない。博物館はますます展示で評価されるものであり、博物館と利用者とのつきあいが続くかどうか、ますます展示の印象で決まつてしまう。展示をもつと大事なものと考えたいと思う。